



ジェフリー・イン (CSR Asia プロジェクトマネージャー)

高橋佳子 (CSR Asia シニア・プロジェクトマネージャー) 監訳

企業のサステナビリティ実現に向けた新年の抱負

私が住む香港では 2013 年 2 月 10 日が旧暦の元旦、つまり旧正月を迎える。

毎年、多くの人が新年に抱負を語り、「今年一年がんばろう」と心に決める。企業も新年にサステナビリティ実現に向け以下のような抱負を立てたらどうだろうか。

サステナビリティ実現のための4つの見直し

1. コミュニティ活動の見直し

毎年、私達をもっと寄付やボランティアをしなければと自分に言い聞かせる。また個人の寄付がよい目的に使われ、価値ある活動に時間を費やしたいと願う。企業も長期的にインパクトをもたらすようなコミュニティ活動へと見直すべきだ。

①リソースの整理:必ずしも量=質ではない。企業内に様々なコミュニティ活動が存在しすぎて、状況が把握しにくくなっている場合がある。全ての資金が実際にどう使われ、コミュニティに良いインパクトを与えているのか検証する。

②戦略の明確化:社会のどのグループが最も支援を必要としているか? コミュニティ活動の目的は? こうした簡単な問いかけをすることにより戦略が立てやすくなり、社会のために効果的な取組みを実践することができる。

③インパクトの測定:活動がもたらす量的・質的効果の測定については、独自の方法を開発、またはロンドン・ベンチマーキング・グループ (LBG) などを利用するなど簡単かつ効果的で小規模でもよいので必ずインパクトを測る。

2. ステークホルダー・エンゲージメントの機会を増やす

人は人生において大切な人々との関係を維持するため、多くの時間を家族や友人と過ごそうと努力する。企業の場合、ステークホルダーとの関係が重要である。ステークホルダーと最後に対話してからかなり時間が経っているかもしれない。

また毎年、決まりきった内容の協議を繰り返している場合もある。今年こそはステークホルダーと関わる機会を増やす。

①新たなステークホルダーとの関わり:これまであまり関わりを持たなかったグループや新たなステークホルダーと関わりをもつようにすれば、見落とししてきた重要な情報が得ら

れるかもしれない。

②ステークホルダーの懸念に対応:企業にとって、ステークホルダーの意見は対応すべき課題を把握する上で不可欠である。しかし、一方でステークホルダーは、その懸念に対し、適切な対応がされてないと思っている。実際にステークホルダーの期待に応えられるプランを作ることが求められる。

③社員のことも忘れないで:同じ会社で働く社員は企業のサステナビリティ実現のための原動力になり得るため、同僚が何を期待しているのか理解することが重要である。社員が懸念や期待を分かち合えるような機会を作ることが望ましい。

3. コミュニケーションの強化

人は、外見を変えたりスリムになり人目を惹こうとする。

企業の戦略も同じで、改善しても誰も気づいてくれなかったら意味がない。CSR レポートも最初に始めた頃には人々の気をひくことができたが、最近だんだん新鮮味がなくなってきたかもしれない。コミュニケーションの方法をイメージチェンジし、ステークホルダーにとって魅力的なものにしたらどうだろうか。

①透明性、開示性と重要性を高める:企業は、過去のデータを含め重要な領域を再認識し情報の開示を徹底する。

②単なるコミュニケーションという枠を超える:ステークホルダーの関心が高まり、対話の場となるようなソーシャルメディア戦略の開発を検討する。

③ CSR レポートや統合レポートは常に更新し「生きたもの」にする:最近では年次 CSR レポート発行や企業の ESG データの年 2 回の更新が普通になった。だが、そうしたサイクルからはずれ、ESG データを常に更新したり、企業の財政情報に統合することにより、情報の重要性を示す。

4. 首尾一貫

今年は、「企業のサステナビリティへの取組みを改善するのだ。」とただ単に宣言するのではなく、実行に移さなければ意味がない。達成したい目標を定めれば、たとえ成果はすぐ簡単には出なくても、企業のサステナビリティ実現へ向けて長期的な効果がみえてくるはずだ。